

ディズニープリンセス

と

幸せの法則

荻上チキ

ありのまま

の先に

本当のハッピーエンドがある。

『白雪姫』から『アナと雪の女王』まで  
プリンセスたちはなぜ「幸せ」になれるのか？

ディズニーが仕掛ける魔法の秘密



ディズニープリンセスと幸せの法則

荻上チキ

星海社

58







めでたしめでたし

で終わる物語。

だけど「幸せ」のかたちは

みんな、ちがう。

プリンセスの歴史を紐解くと、

「幸せ」の法則が見えてくる。



これまでディズニーは、数々のプリンセスを世に送り出してきました。困難を乗り越え、「真実の愛」を知り、すえなが末永く「幸せ」に暮らすプリンセスたちの物語は、世界中で愛され、語り継がれています。

本書は『アナと雪の女王』を中心に、歴代のディズニープリンセス作品が「夢」や「幸せ」をどのように描いたのか、その変化を読み解き、作品に隠された幸せになるための「法則」コードを明らかにしてゆきます。物語の構造を分析していくため、細かなあらすじを多く載せています。あらかじめ断っておくと、ネタバレ全開です。びつくりするくらいネタバレしていきます。ネタバレが嫌いな人はご注意ください。

映画の分析手法はいろいろあります。資本やマーケティングに着目する仕方。監督や製作陣に着目する仕方。モーシヨンや色彩に着目する仕方。実に多様です。でも、本書で用いた手法はシンプルです。ストーリーを読み解くこと。作中で反復する表現に注目すること。人物の台詞セリフに注目すること。原作と対比すること。テーマやモチーフの系譜を追うこと。以上です。台詞や



歌詞のニュアンスが伝わるよう、必要に応じて原文も並べて掲載しています。

ディズニー作品は、一流のクリエイターたちが携たずさわる総合芸術ですから、製作会社や監督に注目しても、音楽や引用に注目しても、重厚な評論になるはず。おそらくこれからも、類書が多く出るでしょう。でも本書は、監督や製作陣の語る製作意図、資本やマーケティングの動きなどについて分析する、実証的なアプローチは採用していません。あくまで、作品（テキスト）を読み込み、比較するという手法に限りませんでした。

『アナと雪の女王』現象で面白いと思ったのは、多くの人が、作品をめぐる論考を語りたがったことです。「語り」を誘発するという、作品そのものの力強さを感じました。だからこそ、できれば『アナと雪の女王』単体だけでなく、過去のプリンセスたちの冒険を継承したものであるという視点も、多くの人と共有したい。そう願って、1時間くらいで読めるディズニープリンセス史論をめざして本書を書きました。





それではさっそく、  
ディズニープリンセスたちの  
歩みを追いかけて  
みましょう。

INTRODUCTION

3

第1章

新時代のプリンセス誕生！

『アナと雪の女王』 15

ミュージカルアニメ『アナと雪の女王』はなぜ「傑作」なのか？ 16

原作『雪の女王』から受け継がれるもの 19

「幸せ」の法則、デイズニーコード 24

変わる夢、変わるプリンセス 28

第 2 章

デイズニープリンセスの原点

『白雪姫』 『シンデレラ』 『眠れる森の美女』 75

三度の反復に注目せよ 33

孤独を終わらせるために 36

「Let It Go」だけでは「幸せ」になれない 46

アナとエルサの助言者たち 56

なぜハンスはクリストフに「負ける」のか？ 61

「真実の愛」の重み 65

古典世界のプリンセスたち 76

美しさは善の世界観『白雪姫』 78

運命の The One を待つ 84

身分が違う白雪姫とこびとたち 90

第 3 章

ディズニールネッサンス期の光と影

『リトル・マーメイド』 『美女と野獣』 『アラジン』 117

30年ぶりに復活したプリンセス 118

王子を待つてなんかいられない！ 『リトル・マーメイド』 120

自由恋愛のすすめ 『シンデレラ』 92

プリンセス像のアップデート 94

お伽噺のなかのお伽噺 97

ディズニールコードの禁則事項 100

夢見た王子ではないけれど 『眠れる森の美女』 103

新しい家族のありかた 108

ディズニールコード 115

1.0

## 躍進する3Dアニメーション

『シュレック』 『トイ・ストーリー』

165

プリンセスが変わればヴィランも変わる 123

人魚のまま恋を実らせることはできなかったのか 125

アンチ・ひとめぼれ『美女と野獣』 131

価値観を理解してくれる相手だからこそ 139

世界のルールを変えろ『アラジン』 145

欲しいのは王子ではなく自由 148

さらなる多様性をもとめて 153

ヴィランはいかに滅びるのか 157

ディズニークード

# 2.0

163

まだ見ぬ未来のプリンセスたちへ

暗黒期に生まれたアンチ・ディズニー作品 166

ディズニーコードとのギャップに苦悩する怪物『シュレック2』 172

ヴィランたちの逆襲『シュレック3』 177

育児ノイローゼから自由になりたい！『シュレックフォーエバー』

180

理想形は変化する——『トイ・ストーリー』 185

理想を選びなおす『トイ・ストーリー2』 190

古い友達、新しい友達『トイ・ストーリー3』 194

あたらしい居場所を与え続けるピクサー 197

懐古主義を乗り越えて 200

悪役に用意された新しい秩序 203

『魔法にかけられて』 『プリンセスと魔法のキス』  
『メリダとおそろしの森』 『塔の上のラプンツェル』

デイズニープリンセスは大迷惑!? 『魔法にかけられて』 208

ピクサーの想像力がデイズニーへと合流! 『ボルト』 221

女性同士の和解というモチーフの獲得 『メリダとおそろしの森』 226

夢はその手をつかむもの! 『プリンセスと魔法のキス』 233

閉じ込め続けられるのはたくさんだ! 『塔の上のラプンツェル』 240

ポスト3・0の模索 『マレフィセント』 248

これからのデイズニーに必要なのは、『リロ&スティッチ』のオハナ精神 251

## デイズニーコード 3.0

255



第 1 章

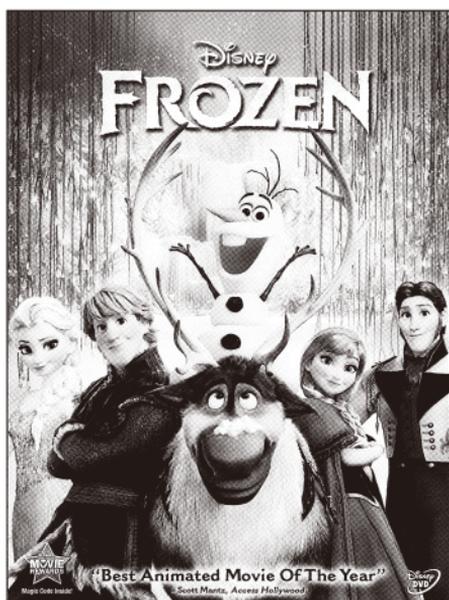
# 新時代の プリンセス誕生!

『アナと雪の女王』

ミュージカルアニメ『アナと雪の女王』はなぜ「傑作」なのか？

2014年に公開されたディズニーアニメ『アナと雪の女王』（原題：Frozen）は、未曾有の大ヒットとなりました。日本での興行収入は254億円を突破。これは『千と千尋の神隠し』『タイタニック』に次ぐ、歴代3位の記録となっています。ブルーレイとDVDがセットになった商品も290万本以上の売上げ。おそらくこれからも、記録は大きく伸びていくことと思われます。

『アナと雪の女王』（以下『アナ雪』）は優れたミュージカルアニメです。劇中で歌われる楽曲の質の高さが、ミュージカルとしてのレベルをも高めています。サウンドトラックの売上げやミュージックビデオの再生回数は、そのことを数値的にも裏付けるでしょう。「Let It Go」などが収録されたサウンドトラックは、国内で約90万枚の売上げを達成しています。ディズニー公式YouTubeチャンネルが公開した「Let It Go」の動画は、なんと7900万回以上も視聴されています。（全て2014年12月時点）



『アナと雪の女王』（2013）

『オズの魔法使い』の「Over the Rainbow」『雨に唄えば』の「Singing In the Rain」『サウンド・オブ・ミュージック』の「Edelweiss」『ヘリー』の「Tomorrow」『レント』の「Seasons of Love」『グランドブルー』の「You Can't Stop the Beat」……。名作ミュージカルは、名曲と共に記憶されます。「Let It Go」もまた、ミュージカル史に残る名曲として、シーンと共に記憶されるでしょう。

ミュージカルは、曲でストーリーを展開させ、曲で感情の深みを表現し、曲でキャラクターを描写し、曲で結末を彩ります。『アナ雪』の劇中でも、数々のキャラクターが、個性的な曲を表情豊かに歌います。実写映画のミュージカルシーンでは、登場人物たちの繰り広げるダンスや場面展開などが見どころになります。しかしアニメーションの場合、現実には不可能なアクションも可能になります。

たとえばエルサが雪山で歌う「Let It Go」。孤独に雪山を歩くエルサを遠く空中から映し始め、そのまま一気に静止のアップショットまで近づいていくというカメラの動きは、実写で再現しようとしてもなかなか難しいでしょう。エルサが徐々に力を解放し、雪の大地を力強く踏みしめ、魔法で氷の城を築き上げるシーンの美しさは、繊細なアニメーションだからこそ表現できたものであると感じさせられます。『アナ雪』は、アニメならではの

アクションが続き、観る者をジェットコースターのようにエンディングへと誘っていきます。

冒頭から続く、氷や雪の描写には目を見張るばかり。山中深くの湖で氷を削り、それを販売することで生計をたてる山男たちの労働シーン。湖の中から凍った水面を映し、その上からのこぎりで氷を削る山男の姿、その影の絶妙な曇り具合、透け具合といったら。そこからラストまでずっと、泡、雪、氷の破片といった細部に至るまで、質感や寒さや冷たさまで伝えるかのような見事な描写が続くのです。水や氷の「透明さ」を、ここまで鮮やかに表現できるものかと、驚かれた方も多いでしょう。

楽曲の力、アクション（演技）の力、描写の力。どれも欠けても、『アナ雪』が「傑作」となることはできませんでした。ミュージカルとしても素晴らしく、アニメとしても素晴らしい。だからこそ『アナ雪』は、ミュージカルアニメとしての金字塔を打ち立てることができたわけです。

しかし、私が特に驚かされた理由は他にあります。それは、『アナ雪』の持つ、「系譜的な到達点」の凄味でした。私はこれまで趣味でミュージカル映画を、そしてデイズニープリンセス作品を好んで見続けてきました。だからこそ、『アナ雪』が過去のミュージカル映

画、ディズニープリンセス作品を上手に意識したうえで、それらを乗り越える新しい物語を提示していることに衝撃を受けたのです。この作品が登場したことにより、ミュージカルアニメ、ディズニープリンセス作品の系譜には、「アナ雪以前」と「アナ雪以後」という、太い太い線引きが行われることになりました。

『アナ雪』は、単体として見ても「面白い作品」として楽しめますが、系譜的に見ていくと、さらに「すごい作品」なのだと分かるようになっていきます。いったいどのような「すごい作品」なのか。それを、これからゆっくり、解き明かしていきたいと思えます。

まず第1章では、『アナ雪』作品そのものの特徴を分析していきましょう。

### 原作『雪の女王』から受け継がれるもの

これまでも数々のディズニー作品が、童話や民話を原作にしながら、現代風にストーリーをアレンジするという手法を使ってきました。今となっては、ディズニーが語り直した物語のほうが、原作の童話よりも有名になっていくものも多いかもしれません。

『アナ雪』もまた、原作付きの作品です。原作となったのは、アンデルセンの童話『雪の女王』（原題：THE SNOW QUEEN）です。ただし、もともとの童話と『アナ雪』とは、ストーリー

も構図もまったく違うものになっています。アンデルセン著『雪の女王』はこんなストーリーです。

昔々、あるところにカイという少年と、ゲルダという少女が暮らしていました。2人は大の親友でした。しかしある日、悪魔あくまの作った鏡の破片が少年カイの目と心臓に刺さってしまったことから、2人の平穏な日々は終わりを告げます。その瞬間から、少年カイは性格が激変してしまったのです。悪魔の鏡には人や物を醜く映すという力がありました。その力に影響を受けたカイは性格が変わってしまい、ゲルダをいじめるようになってしまったというわけです。

そんなカイのもとに雪の女王が現れます。そして、雪の女王に魅入られたカイはどこかに連れて行かれてしまいます。ゲルダはカイがいなくなったことを寂しがり、「カイちゃん、本当はいい子なはずだ」と、カイを取り戻すべく旅に出ることを決意しました。

ゲルダは、川や動物、風、太陽などの自然と会話することができる特性を使って、様々なものに「カイちゃんはどこに行っただの？」と尋ねながら冒険し、とうとう雪の女王の城にたどり着くことができました。けれども、そこにいたカイの心はすでに凍りついてしま

っています。なにをするにも無気力状態になっていました。

それでもゲルダは、カイと再会したのがとてもうれしくて、抱きしめて涙を流します。そうすると、その涙がカイの凍った心臓を解かし、心に刺さった鏡の破片を流していくではありませんか。さらに、ゲルダの姿を見て喜んだカイが涙を流すと、その涙でカイの目の破片も流れていきました。

そうして優しさを取り戻したカイはゲルダと手を取り合って、元住んでいた場所に帰っていきました。

続いて、『アナと雪の女王』のあらすじを紹介しましょう。

昔々、アレンデールという王国にエルサとアナという姉妹のプリンセスがいました。姉のエルサは、触れるものを凍らせる不思議な力を持っていました。姉妹で仲良く遊んでいた時のこと。エルサは誤って氷の魔法をアナに当ててしまいます。意識を失うアナ。慌てた国王はアナを救うべく、辺境の地に住むトロールに助けを求めました。トロールは魔法でアナを救い、そしてエルサに警告しました。危険な魔法の力をコントロールしなくては

ならないと。

この事件以降、城の門は閉ざされ、エルサは部屋に閉じこもるようになりました。魔法の記憶を消されたアナは、突然の変化に戸惑うばかりです。

それから長い長い月日が流れ、再び城の門が開放される日が来ました。エルサの戴冠式たいかんしきを祝うパーティが開かれるのです。久しぶりの外の世界にアナは大はしゃぎ。偶然出会ったハンス王子と意気投合し、その日のうちに婚約までしてしまいます。しかしエルサは結婚に反対。アナと口論になり、興奮したエルサは魔法の力を暴走させてしまいます。

みんなに秘密を知られ、魔女と恐れられたエルサは城を飛び出し、雪山にこもります。アナは凍りついた王国を救うべく、山男のクリストフ、雪だるまのオラフと共に、エルサのいる雪山へと向かうのでした。

原作では、「少女が少年を連れ戻す物語」となっていますが、『アナ雪』では「妹が姉を連れ戻す物語」になっています。もともと、主体的なキャラクターとして少女ゲルダが描かれているのは、大事なポイントだと思います。『白雪姫』や『シンデレラ』と異なり、自ら冒険し、目的を果たすのが、『雪の女王』の少女ゲルダでした。この作品が原作に選ばれ

た時点で、『アナ雪』が、主体的な少女の物語になることはある程度、予想ができたわけ  
です。

原作において、雪の女王は魔女であり、呪いの使い手として登場します。魅入られた人は、雪の宮殿に連れて行かれ、生気を奪われます。凍りついた雪の宮殿は、死の世界のメ  
タファー（隠喩）です。ゲルダがカイを捜しに旅する際、靴を脱いで川を越えるという描  
写がありますが、これから死の世界へと旅立つのだということを示ンボリックに表現して  
いるシーンでした。ゲルダの行動は、氷の城に閉じこもるエルサを身一つで助けに行く妹・  
アナの、無謀とも思える行動と重なる部分も見出せるでしょう。

一方で、『アナ雪』における雪の女王・エルサは、生まれつき魔法の能力を備えた少女で  
あって、悪の存在として描かれてはいません。自らの能力が人に危害を加えないか、人か  
ら恐れられないかと苦しみ、隠し、とうとう人に知られてしまっただけからは、雪山でひとり  
静かに暮らそうとする。原作を知っていると、もしや『アナ雪』は『雪の女王』のプロロ  
ーグを描くことになるのだろうかとかハラハラする。つまり、エルサが魔女化して、呪いの  
使い手「雪の女王」になるのではなからうかと。

原作との明確な違いは他にもあります。『雪の女王』のゲルダは、町の少女として描かれ

ていましたが、『アナ雪』のアナとエルサは生まれながらのプリンセスです。『アナ雪』がダブルヒロインを採用したことにより、これまでのディズニープリンセス作品とはまったく異なる、変化した女性像を描こうとしていることが分かります。

### 「幸せ」の法則、ディズニーコード

これまでのディズニープリンセス作品は、『白雪姫』『シンデレラ』を代表として、異性愛中心の物語が続いてきました。また、数々の作品では、「魔女」が絶対悪として描かれてきました。ディズニーにはディズニーの「お約束」があります。本書ではそれを、「ディズニーコード」(ディズニーの法則)と呼ぶことにします。

典型的なディズニーコードには、このようなものがあります。

- 「プリンセスとプリンスが出会うと恋に落ちる」
- 「真実の愛のキス (True Love's Kiss) を交わすと呪いが解ける」
- 「エンディングは『こうして2人は末永く幸せに暮らしました (They lived happily ever after)』」

魔女との対決もまた、代表的なデイズニーコードの一つ。しかし『アナ雪』は、異性愛中心主義から距離を取り、さらに「魔女と共生する物語」を描いています。明確に、これまでのデイズニーコードを塗り替えているのです。

それにしても、エルサの境遇は悲惨過ぎます。エルサは魔法の力を隠すため、両親から世間と隔離される処遇を強いられてしまいました。この境遇は両親が亡くなった後もずっと続き、愛する妹に対しても打ち明けることができません。そのうえ、能力を晒したとたん、国民から化け物扱いされてしまう。エルサにとっては八方塞がりの状態です。

城を出た後も、追手に殺されかけ、拉致監禁され、しまいには妹を殺しかけてしまうという、さんざんな有り様です。もしこれが『魔法少女まどか☆マギカ』なら、ソウルジェムが濁った結果、魔女化するという展開になっていたでしょう。しかし、『アナ雪』ではエルサは魔女化せず、妹や人々と、つまりは社会と共生するというエンディングになります。エンディングを迎えるまでに、エルサの生き方は、3ステップで変化します。

特性を否定しながら、社会から隠れて生きる

← ←  
特性を肯定しながら、社会から離れて生きる

← ← ←  
特性を肯定しながら、社会と共に生きる

『雪の女王』では、カイにかけられた呪いは、治さなくてはいけないものとして描かれていました。これは、過去のディズニー映画にも共通して設定されていた構図です。従来のディズニーコードでは、魔女にかけられた呪いを解くということが物語のミッションになっていた。 「呪い」はすなわち、治癒<sup>ちゆ</sup>すべき「病<sup>やまい</sup>」のメタファーでもありました。

しかし『アナ雪』においてエルサの魔法の能力は、後天的に与えられた「呪い」ではなくて、生まれつきの「特性」として描かれています。「病」として否定され、消し去られるべき存在ではなく、本来は受け入れられるべき「個性」として描かれます。その受容を阻害するのは、社会からの偏見や迫害であり、それを恐れての自己抑圧です。

現在の様々なマイノリティ運動では、生まれつきの特性は、本人を治療することが最善

の解決策とは限らない、むしろ社会の「不寛容さ＝受け入れなさ」を直していこうという議論がなされています。異民族を「同化」させるのではなく「共存」しよう。「障害」は治療困難でも、そのまま生きやすい社会に工夫して変えていこう、といった具合に。

エルサの3ステップは、同性愛者差別の歴史と重ねて考えてみても分かりやすいかもしれません。同性愛者が誰にもカミングアウト（表明）せず、性的指向を隠すことは、しばしば「クローゼット」と表現されます。エルサは当初、親に「クローゼット」でいることを求められ、誰にもカミングアウトできない日々が続きました。しかしある日、予期せずその特性が晒され、エルサは社会の周縁へと身を寄せます。人はほとんど来ないが、居心地の良い僻地<sup>へきち</sup>での暮らしは、小さなコミュニティに身を寄せ合ってサバイブしてきた同性愛者たちの歴史ともリンクします。さらに特性を隠さず、オープンにしながら社会と共生するというエンディングは、極めて現代的なものであると言えるでしょう。

特性がコントロールしづらいために、他人との衝突を恐れるという意味では、発達障害のメタファーとしても捉えることができます。発達障害当事者に必要なのは、自己の特性を知り、発達の凸凹<sup>でこぼこ</sup>を補うための療育と、社会の側の理解です。しかしエルサは、自己の能力をコントロールする術<sup>すべ</sup>を誰にも教わらず、ただただ隔離されるのみ。これでは、社会

との共生は遠のくばかりです。

現在、様々なマイノリティ運動が、多様な特性との共生を目指しています。「魔女と社会の共生」というコンセプトは、そうした様々な「生きづらさとの戦い」の持つリアリティを取り入れた、意欲的なものになっています。

### 変わる夢、変わるプリンセス

ディズニーマニアの独特の法則・ディズニーマニアコードは、これまでも更新を続けてきました。たとえば、ディズニーマニア映画におけるプリンセスものの代表格『白雪姫』には、「いつか王子様が」（原題：Some Day My Prince Will Come）という曲があります。懸命に家事をこなす白雪姫が、7人のこびとに対して、次のように歌います。

いつか王子様がやってくる

Some day my prince will come

いつか私たちはめぐりあうの

Some day we'll meet again

彼の城に帰る

And away to his castle we'll go

いつか春が訪れる

To be happy forever I know

いつか春が訪れる

Some day when spring is here

私たちの愛がめはえるの

We'll find a love anew

そして小鳥たちがさえずる

And the birds will sing

ウェディング・ベルが鳴り響く

And wedding bells will ring

いつかきいた夢がかなう時がくるわ

Some day when my *dreams* come true

いつの日にか王子様が来てくれるその日を私は夢に見る

夢に見るの王子様が白い馬に乗って迎えにきてくれるその日

また、『シンデレラ』には、「夢はひそかに」（原題：A Dream Is a Wish Your Heart Makes）という曲があります。シンデレラは映画冒頭のシーンで、鳥たちに起こしてもらったのち、髪をとかし、服を着替えながら、次のように歌います。

自分の夢を信じてなごむ そうすれば

Have faith in your dreams and someday

希望の虹が見えてくる

Your rainbow will come smiling through

たとえどんなに悲しくても

No matter how your heart is grieving

信じ続けようね

If you keep on believing

夢はきくと叶うよ

The dream that you wish will come true

日本語版

いつかは必ず虹がほほえむわ

たとえ辛い時も信じていれば夢は叶うもの

デイズニーミュージカルの歌詞には、「夢」(dream)という単語が頻繁に出てきます。特に初期のデイズニーコードにおいて、「夢」とは、愛しい王子が苦境から救ってくれることに他なりません。美しく心が清いプリンセスが願い続ければ、いつかは必ず報われる。こうしたお約束のもと、「プリンセスは王子のキスを受動的に待つ」というストーリーが繰り返されてきました。

しかし、時は進んで1989年の『リトル・マーメイド』以降のデイズニー映画では、そうしたお約束が変化します。プリンセスはただ単に待っているだけの存在ではなく、もっと積極的に活動するというストーリーに変わってきました。『リトル・マーメイド』のプリンセス・アリエルは、父親から求められる生き方を拒否し、自分が恋した相手と結ばれることを望みます。そのため、自ら魔女と契約し、人間となり、恋した相手の唇くちびるを求めに行く。おしとやかで清楚せいそなヒロインではなく、活発で意志の強いヒロイン像が、この頃から強調され続けてきました。『美女と野獣』のベルも、『アラジン』のジャスミンも、「王子様を待つ受動的なプリンセス」という像から大きく離れたキャラクターです。

デイズニープリンセス作品は、常に初期の『白雪姫』『シンデレラ』的なデイズニーコードを自己批評し、アップデートしようと試み続けてきました。本書ではひとまず

『白雪姫』『シンデレラ』のような初期作品のパターンをデイズニーコード1・0

『リトル・マーメイド』のように更新されたパターンをデイズニーコード2・0

と呼ぶことにしましょう。それぞれのバージョンの意味や定義については、本書全体を通して明らかにしていくことにします。

『アナ雪』はもちろん、デイズニーコードの新陳代謝<sup>しんちんたいしや</sup>、その系譜的な到達点にあります。『リトル・マーメイド』以降の作品群、デイズニーコード2・0で行われていた自己批評をさらに進め、デイズニーコード3・0にまでアップグレードさせてみせました。そしてエルサもまた、プリンセス3・0とも呼ぶべき姿を見せつけました。『アナ雪』では、ヒロインの主体性が力強く描かれています。しかしそれだけでは、2・0の作品群と変わりありません。ではどういう点が、『アナ雪』、そしてエルサの新しさなのでしょう。

### 三度の反復に注目せよ

映画分析においては、「三度の反復に注目せよ」という、王道の手法があります。作中で同じモチーフが繰り返して映される時、そこには必ず差異と反復が存在する。その変化の中に、重要なメッセージが隠されているということです。『アナ雪』の主題は、「真実の愛とは何か」です。この問いに対し、作中では二度の「肩透かし」を行うことで、三度目のモ

チーフの登場、デイズニーコード3・0の新しさを印象付けています。

『アナ雪』では、異国の王子・ハンスというキャラクターが登場します。馬にまたがり登場し、ヒロイン・アナとぶつかるという印象的な出会い方をします。2人は互いに恋に落ち、デュエットで愛を叫びあう。「デュエットは真実の愛の証」という従来のデイズニーコードに則るならば、アナにかけられた魔法は、ハンス王子との「真実の愛のキス」で解けるとするのが王道です。

しかし物語が進み、いざアナがハンスとキスをしようとする、ハンスはアナを裏切り、その真意を語りだします。ハンスは実は、権力欲にまみれた男で、アナと結婚することで国を乗っ取る計画を企てていたというわけです。素敵な王子とハッピーエンドを迎えるというデイズニーコード1・0的なエンディングをほのめかしておきながら、オーディエンスに肩透かしを食らわせるという憎い演出でした。

ハンスとの恋は、「真実の愛」ではなかった。だとすれば、身分は高くないけども、刺激的な冒険を共に行った男性・山男のクリストフが「真実の愛」の候補にあがります。ハンスに裏切られたアナは、クリストフの姿を探します。彼こそが、自分にかけてられた魔法を解いてくれるのではないかと。

クリストフの姿は、デイズニーコード2・0のヒーローたちを彷彿ほうふつとさせます。身分が決して高くなくても、恋に落ちたなら関係ない。『アラジン』のヒーロー・アラジンも一般人でした。アナもやはり、これまでの作品群と同様、身分にとらわれない恋をすることで、ハッピーエンドを迎えるのか。そう思わせておいて、またまた肩透かしです。

アナは、あと一步でクリストフとキスできるといふ場面において、姉・エルサのピンチを目撃します。クリストフに駆け寄るか、姉に駆け寄るか。とっさの判断でアナは、身を挺たてして姉を助けることを選びます。

アナは、ハンスからエルサを守ろうと、ハンスが振り下ろす剣の前に立ちはだかります。その瞬間、エルサにかけられていた魔法が原因で全身が凍りづけになり、アナは氷像と化してしまふ。凍ったアナにぶつかつた剣は粉々に折れ、ハンスはその衝撃で吹き飛ばされます。

エルサを守るため、氷像となつたアナ。エルサはそんなアナの姿に衝撃を受けます。アナの氷像に抱き付き、涙を流すエルサ。遠くから見ている臣民を含め、誰もが悲しみにくれていると、アナにかかつた魔法が徐々に解けていきます。気づけばエルサがもたらした吹雪ふぶきも止んでいます。そう、姉妹の和解こそが、「真実の愛」だつたというわけです。

『アナ雪』では、3度の反復によって、過去のデイズニープリンセス作品の歴史を一気にたどり、それを乗り越えて見せました。ハンス王子との愛ではなく、苦楽を共にした一般人・クリストフとの愛でもない。デイズニーコード1・0、デイズニーコード2・0的な結末を巧みにかわし、ホップ・ステップ・ジャンプを挟んだうえで、姉妹がつらい過去を乗り越えること、それぞれの特性を受け入れることこそ、「真実の愛」なのだと言いつつバージョンアップしてみせたわけです。

### 孤独を終わらせるために

映画の中で繰り返される「三度の反復」について、もう少しお話しましょう。「真実の愛」の描写以外にも、作中にはいくつかの反復があります。たとえば、作中に流れる「生まれてはじめて」(原題: For the First Time in Forever)という曲がそれです。

エルサが成人して戴冠式を行うため、ずっと閉ざされていた城門が開かれるシーンで、アナとエルサが歌う曲です。異国の王族や、街の民衆たちも、この日を楽しみにしていました。アナは「今日はいろんな人に会えるのよね。運命の人にも会えるかも」と大はしゃぎ。その時に彼女が歌った内容は、次のようなものです。

窓が開いている… ドアもだわ…

The window is open! So's that door!

そんなところがあるなんて もう思っつてなかった…

I didn't know they did that anymore!

ここに8千枚のサラダ皿があるなんて知らなかった…

Who knew we owned eight thousand salad plates…?

何年もの間この空っぽの広間を歩き回っていったのよ

For years I've roamed these empty halls

舞踏会もないのになんで舞踏会場があるの？

Why have a ballroom with no balls?

だけどもういかにその扉が大きく開かれている…!

Finally they're opening up the gates!

実際ほんとに生きている人々がやってくるのよ

There'll be actual real live people

まったく予想のつかないこととなるはず

It'll be totally strange

だけど、そうよ、そんな変化への準備はじつかりできているわー

But wow, Am I so ready for this change!

だって生まれはじめて

'Cause for the first time in forever

音楽があふれ ライトがあふれることになるんだものー

There'll be music, there'll be light!

生まれはじめて

For the first time in forever

私は夜通し踊るのよ……

I'll be dancing through the night...

自分が嬉しくて高揚してるのか、舞う上がってるのか分からないけれど

Don't know if I'm elated or gassy

そんな状況のどこか下にいるのー

But I'm somewhere in that zone!

だって生まれてはじめて

Cause for the first time in forever

ひとりぼっちじゃなくなるんだから

I won't be alone

日本語版

窓もドアも開いてる

なんて久しぶりなの

お皿もこんなにたくさん

閉ざされてた部屋も

お祝いのためにきれいに飾られて

まるで違う場所ね

不思議な気持ち

このときを夢見てた

そう生まれてはじめて音楽にのり

生まれてはじめて踊り明かすの

ああうれしすぎてあたし舞い上がりそう

もうひとりじゃないの夢のよう

閉じこもっていた状態から解き放たれることの喜びを、アナは目を輝かせて歌います。もしかしたら運命の人に出会えてしまうかも、などと妄想も膨らみます。一方でエルサは、不安に押しつぶされそうになるのをこらえながら、自分に言い聞かせるように歌います。最初は小さくささやくように、しかし徐々に決意するかのように力を込めて歌うのです。

みんなの中に入れてはダメ みんなに見せてはダメ

Don't let them in don't let them see



この「生まれてはじめて」という曲は、作品内で三度もかけられます。一度目は前出の城門を開けるシーン、二度目は魔法を使えることを知られてしまったエルサの閉じこもる氷の城をアナが訪ねて行くシーンです。

一度目、二度目のシーンでは、「エルサにとっての不幸」が描かれています。魔法を隠し、城門を閉めて誰も入れたくないと歌う一曲目。氷の城を築き、外界から断絶した生活を送る二曲目。「エルサの幸せの形はこれではない」というタイミングで、「生まれてはじめて」が歌われます。

どうか家に帰って あなたには自分の人生があるのよ

Please go back home your life awaits

行って 太陽の恵みを満喫しなさい そして門を開け放したらいい

Go enjoy the sun-and open up the gates

わかってるわー あなたの強いやじは だけどかまわならぬ

I know! You mean well but leave me be

そうよ 私はひとりぼっち だけどひとりだから自由なの…  
Yes, I'm alone but I'm alone and free!

離れていてよ そうすればあなたは安全なはず  
Just stay away and you'll be safe from me

日本語版

お願いよ 帰りなさい

太陽が輝く国へ

ここでは

ひとりだけど

自由に生きられるの

わたしに近づかないで

エルサは、閉ざされた氷の世界の中で、1人で暮らすという決意を固めていました。し

かし、王国・アレンデルが自分のせいで危機に陥おちいっていることを知ると、「私はなんて愚かだったの。自由になんてなれないんだ！」(Oh! I'm such a fool, I can't be free)と悲痛な声で歌います。幸せを手に入れたようでいて、未だに自分の能力をコントロールできないことの苦痛が、ここで表現されるのです。

三度目に「生まれてはじめて」がかかるのは、エルサが社会に受け入れられるラストシーン。壮大なオーケストラの演奏によるもので、「雪だるまつくろう」とのリミックスになっています。不自由で孤独な一曲目。自由だけど孤独な二曲目。それらと比べて、「魔法をカミングアウトしてなお、人々と共に生きる」というエンディングが際立きわだつような構成になっています。

もし、一曲目、二曲目のタイミングで、エルサの願いが叶っていたなら、その後はどうなつたでしょうか。戴冠式を上手く乗り切れさえすれば、それはハッピーエンドなのか。おそらくそうではない。戴冠式が終わった後、再び扉と窓を閉じ、アナを遠ざけて暮らす。受難がその後も続くということになってしまいます。

二曲目のタイミングではどうでしょうか。エルサが断絶を選び、そのことで自由になるかもしれませんが、孤独なままの暮らしが続きます。そもそもエルサは、幼い頃からずっ

と隔離されていました。孤独なまま暮らすことが、特性によって宿命づけられるというのは、あまりに悲しすぎます。アレンデルの扉から、氷の扉へと、閉ざす扉が入れ替わっただけなのですから。

かつて、障害者に対する処遇として、広く「私宅監置<sup>したくかんち</sup>」というものが行われていました。個人の自宅に牢<sup>ろう</sup>を作り、世間に見せないよう過ごさせるということです。また、かつて様々な障害者に対して、「隔離政策」が行われたこともありました。これは、社会とは切り離された場所に、障害者だけのコミュニティを作り、そこで暮らせるということです。

エルサの歩みが、こうした負の歴史のように「私宅監置」から「隔離政策」へと切り替えられたのだと置き換えれば、その厳しさが分かるかもしれません。確かに今までより自由かもしれない、だが本当にそれがベストだと願ったのか。アナと自由に雪だるまを作つて遊ぶ。そんな生活こそを求めていたのではなかったのか、と。

しかし、三度目に「生まれてはじめて」がかかる時、エルサは街の住人たちに対して、自分の能力をオープンにしています。人々のためにスケートリンクをつくるエルサ。そのリンクで遊ぶ人々。こうして「生まれてはじめて」が三度目に流れるシーンには、自由と共生の形が描かれることになりました。

なお、「生まれてはじめて」が、ヒロイン同士のデュエットであるというのも、デイズニープリンセス作品史上、重要な意味を持ちます。この曲では、2人の女性の生き方が対比されながら描かれています。そのうえで、「デュエットは真実の愛の証<sup>あかし</sup>」という旧来的なデイズニーコードに、新たな意味を与えているのです。これまでのデュエットは、異性間で歌われてきましたから。ちなみに、山男・クリストフは、トナカイのスヴェンとデュエットもどきをしているのですが、両者が信頼に満ちたパートナーであることも疑いようがないでしょう。

### 「Let It Go」だけでは「幸せ」にならない

ほかのデイズニー映画と比べても、『アナ雪』は名曲が多く、映像的な愉楽も用意されています。代表曲の「Let It Go」は、コード進行から演奏に至るまで、エルサの感情の動きを丁寧に表現しています。

エルサが雪山を登るシーンは、静かなピアノの旋律<sup>せんりつ</sup>から始まり、マイナーコードによってメロディが悲しく響きます。低いピアノと小さなストリングスが、静かにゆっくりとエルサの声を包みます。エルサもまた、消え入るようなウイスパーボイスで、かすれ気味に

歌います。

今夜の山は雪が白く輝く

The snow glows white on the mountain tonight

足跡をよじ見えない

Not a footprint to be seen

まるで孤独の王国 私はその女王様

A kingdom of isolation, and it looks like I'm the Queen

心の中で渦巻く嵐のまじりに 風が唸り出す

The wind is howling like this swirling storm inside

どうしても抑えられなかったの

Couldn't keep it in

間違えなく頑張ったんだけど……

Heaven knows I tried...

降り始めた雪は足跡消して

真っ白な世界にひとりのわたし

風が心にささやくの

このままじゃダメなんだと

国を飛び出し、雪山を歩くエルサ。孤独を感じさせるシーンですが、そこには力を解放しても咎められないという自由がある。エルサがそのことに気づくと、Bメロにさしかかり、モードが切り替わります。

みんなの中に入れちゃダメ みんなに見せちゃダメ

Don't let them in don't let them see

いい子にしてるのよ いっだってそうしてなきゃ……

Be the good girl you always have to be...

秘密にしておくの 感情を押し殺して みんなに知られないようにするのよ

Conceal don't feel don't let them know

いらえ もうみんな知ってるわー

Well now they know!

日本語版

とまどい 傷つき 誰にも 打ち明けずに

悩んでた それももう

やめよう

エルサが「Don't let them in, don't let them see」と歌うシーンにおいて、指を一本立て、下の方を見つめながら眉をひそめる彼女の身振りは、子どもに説教をする親の姿を模倣しています。自分は今まで、能力を隠すように親から言い聞かされてきた。だけれど、既に知られてしまったのだから、もう自由に生きてしまおう。日本語版の歌詞では、「悩んでい

た自分」が「ありのままの姿」を肯定する、という自己啓発的なメッセージにとらえられがちですが、英語詞では、抑圧を受けてきた経緯と、そこからの解放感がより強調されています。

実は、この歌詞の部分も、三度の反復になっています。「Don't let them in, don't let them see」という言葉は、「生まれてはじめて」の歌詞の中でも繰り返して出てきていました(40ページ参照)。その前にも、「雪だるまつくろう」(原題: Do You Want to Build a Snowman)の曲中に、国王がエルサに手袋を与え、2人で共に「隠しなさい、感情を押し殺しなさい、見せないようにしなさい」(Conceal it, Don't feel it, Don't let it show)と復唱するシーンがあります。そう。この言葉は、父親である国王から、エルサが繰り返しい聞きかされていた言葉だったのです。

魔法を隠すため、人との交流を制限されてきたエルサ。魔法そのものではなく、親の戒めこそが、彼女にとっての呪縛じゆばくとなっていました。幼少時代、彼女に助言したトロールは、「美しい力だが、危険を秘めている。力をコントロールできるようになりなさい」と述べました。それを聞いた国王は、「力を抑えられるようになるまで、城の門を閉ざし、召使を減らし、人に合わせないようにする」という方針を決めたのです。トロールの提案は、あくまで「コントロール」が主眼だったのですが、国王が隔離という手段を選んだのです。

そうした抑圧から、予期せぬ形で彼女は解放されました。エルサは雪山でそのことに気づき、父親から与えられた手袋を宙へと放り投げます。そこから「Let It Go」の曲調が変わり、ピアノの音色もキラキラと輝きます。自らの力を確かめるように、魔法を放つエルサ。彼女の解放感と共に、演奏もクレッシェンドになっていく。そうして、いよいよ「Let It Go」のサビの部分が始まります。

かまわなご それでいっしょに  
Let it go, let it go

これ以上隠しておけなご  
Can't hold it back anymore

かまわなご それでいっしょに  
Let it go, let it go

背を向けて ドアをハンタムと閉めてしまおうのよー！  
Turn away and slam the door!

みんなが何と言おうと気にしない

I don't care what they're going to say

嵐をもっと暴れ回らせてやる

Let the storm rage on

どうせ私は寒さなんてまったく平気なんだから

The cold never bothered me anyway

日本語版

ありのままの姿見せるのよ

ありのままの自分になるの

何も怖くない風よ吹け

少しも寒くないわ

この部分から、エルサの表情に笑顔が目立つようになります。最初は、自らの力を恐る

恐る解放する、いたずらっぽいな子どものような笑顔。それが、徐々に力強い決心の笑顔に変わり、氷の世界を楽しむようになっていく。「もう二度と戻らない、過去は過去のもの」(I'm never going back, the past is in the past)と歌って冠を投げ捨て、髪型を変え、氷のドレスを身に纏う。表情がどんどん生き生きとしたものとして描かれ、最後に氷の城を作り上げ、「もう寒さなんて邪魔にはならないのだから」(bothered me anyway)とささやき扉を固く閉ざす際には、もはや成熟した大人の色香漂う微笑を浮かべている。

二番からはオーケストラが合流し、演奏も豊かになります。ドラムのハイハットもリズムカルで、ストリングスも陽気にスタックカートを刻みます。曲が三番に入ると、ストリングスも伸びをまし、ドラムも大きくシンバルをたたく。旋律、歌詞、そしてアレンジ共に見事な構成です。

かまわなうわ じうとせうごうのー

Let it go, let it go!

私は夜明けの光のまっくらにキッパリと立ち上がるー

And I'll rise like the break of dawn!

かまわないうわ どうでもうららのー  
Let it go, let it go!

あんな完璧な少女はもういなくなってしまったのよ！

That perfect girl is gone!

こうして陽の光に包まれて立ってらる私……

Here I stand In the light of day…

嵐をもっと暴れ回らせてやる!!!

Let the storm rage on!!!

どうせ寒さなんてまったく平気なんだから

The cold never bothered me anyway

日本語版

これでいいの自分を好きになって

これでいいの自信じて

光、あびながら歩きだそう

## 少しも寒くないわ

「Let It Go」の曲展開は、ミュージカル映画の王道パターンをトレースしているとも言えます。悲しい出来事があり、上手くいかなないこともあったけれど、悲しみを乗り越えて大団円を迎える。そうした構成を、この歌自体が再現しています。エルサが「Let It Go」を歌うシーンだけをミュージックビデオとして観ても、起承転結があつて十分に楽しむことができるようになっていきます。氷の彫刻のように、繊細な素材を丁寧に構築して、見事な形に作り上げている曲となっています。

エルサが「Let It Go」を歌うのは、決して明るいシーンではありません。エルサが求めた自由は、氷の城に閉じこもり、外部との交流を断つことで得られた孤独なものだからです。常に第三者 (third) の存在を気にし続け、隠すよう努めてきたにもかかわらず、結局は魔法が使えることを知られてしまい、挙句の果てに怪物扱いされてしまった。もう、自分の魔法で誰も傷つけない、自分も傷つきたくないという消極的な選択でした。だからこそこの曲には、なげやりで自暴自棄なニュアンスも含まれているわけです。

## アナとエルサの助言者たち

『アナ雪』には、魅力的なサブキャラクターが複数登場します。中でも、助言者として振る舞う重要なキャラクターが2人います。雪だるまのオラフ、そして岩の形をしたトロールたちです。

オラフは、エルサが氷の城に閉じこもる際に魔法で作りあげた雪だるまです。そして、アナとエルサが幼い時に作っていた、2人の絆きずなの証でもあります。

ディズニーのようなミュージカル映画では、様々なキャラクターが歌によって自己紹介することがあります。そうしたシーンでは、個性的な演出が繰り広げられる一方、あまりにキャラクター紹介に専念しすぎると、ストーリー展開を止めてしまい、「物語が間延びしてしまう」という欠点もあります。

オラフもまた、その登場シーンにおいて、「あこがれの夏」(原題: *In Summer*) という曲を歌います。このシーンは不思議なシーンで、見ようによっては間延びしているようにもとれる。しかしそれでいて、とても重要なシーンになっています。

オラフは作中で「もしも夏が今来たら思いきり遊んで楽しもう」「浜辺でくつろいでこんがり日焼けをしよう」と歌います。しかしオラフは雪だるまですから、本当に夏が来たら

解けてしまいます。エルサによって雪の世界にされた王国が元に戻ってしまったら、オラフは消滅してしまうわけです。このオラフの登場により、エルサが単にアレンデルの雪をなくすだけでは、ハッピーエンドではないということが仄めかされることとなりました。

オラフは「あこがれの夏」の中で、「暑い夏と寒い冬 ふたつ合わせたらもつといい」(Hot and the cold are both so intense. Put 'em together, it just makes sense)と歌います。エルサが作り出した雪だるまが、実は夏にあこがれている。これはエルサの本音を言い表しているようにも見えます。また、オラフが歌う「暑い夏と寒い冬」という歌詞は、それぞれアナとエルサを象徴しているように響きます。アナの幸福と、エルサの幸福。それらが共存するところにこそ、真のエンディングがあるのだと暗示しているわけです。

今までのディズニー映画でも、サブキャラクターが主人公に向かって歌い上げるシーンがありました。そのなかには、「現状肯定」を主人公に促す内容が含まれている場合があります。たとえば『リトル・マーメイド』の「アンダー・ザ・シー」では、宮廷音楽家であり、プリンセス・アリエルのお目付け役である蟹かにのセバスチャンが、「陸に行くのは大きな間違い」(You dream about going up there. But that is a big mistake)と歌い、アリエルを説得しようとしません。『ライオン・キング』の「ハクナ・マタタ」では、王国から追い出され、悔やみながら

もさまよう王子・シンバに対し、ミーアキャットのテイモンとイボイノシシのブンバアが、「ハクナ・マタタ（氣にするな）」と歌います。

心地いい曲に包まれて、「このままでも悪くないかな？」という気持ちになるのですが、そこで歌われている内容は、主人公の本来あるべき姿ではありません。『リトル・マーメイド』でアリエルは陸に憧れ続けたし、『ライオン・キング』のシンバも、結局は王国を守る使命感に突き動かされることになります。

『アナ雪』における「あこがれの夏」はどうでしょう。オラフが生き続けるためには、冬が続かなくてはなりません。しかしオラフ自身は、現状肯定ではなく変化を求めています。オラフの歌は、コミカルなものでありながら、世界が進むべき方向を示したとも言えます。

では、もう一方の助言者、トロールはどうでしょうか。エルサの説得に失敗し、魔法によつて苦しむアナたちは、トロールたちのところに身を寄せます。クリストフの帰りを喜ぶトロールたちは、アナのことを、クリストフが連れてきたガールフレンドだと勘違い。いかにクリストフがトロールたちに愛されているかが伝わってきますが、ここでトロールたちもまた、オラフ同様、作品の中に通底するメッセージを歌います。「愛さえあれば」という曲です。「何が問題なお嬢ちゃん。なんでこんないい男をほっとくのさ？」と、おせ

つかいな合唱が始まります。

だから彼には改善すゝきところがちよつとある  
So he's a bit of a fixer-upper

だけどこのことはたごか

But this we're certain of

彼の欠点をちやんと改善できるって

You can fix this fixer-upper up

あなたならちよつとはかりの愛情で…

With a little bit of love!

日本語版

問題はあるけれど大丈夫さ

仲良くやれるはず

愛があれば

原題は「Fixer Upper」。意味は「手を加えよう」といったようなニュアンスでしょうか。歌詞にも「fix」という単語があちこちで出てきていて、全体的に「人は誰しも欠陥や問題があるけれど、ちよつとの愛情さえあれば折り合いをつけられるはずだ」というものです。デイズニーコード1・0では、完璧な美しさを持つ者同士の「真実の愛のキス」(True Love's Kiss)が歌われていたのに対し、「彼は臭うし立小便もするけれど、ほんのちよつとの愛情で乗り越えられるよ」と歌うこの曲は斬新です。ここにも、デイズニーコード3・0の新しい風を感じることができます。

大小様々なトロールが入れ替わり立ち替わり歌い、果てにはオラフも加わって大合唱するこの歌の助言は、アナとエルサとの関係にも当てはまります。「欠点を隠すのではなく、カミングアウトしたうえで、互いに手直して進むべき道へ行こう」ということを歌うおらかな内容なのですから。『アナ雪』のメッセージは、単に「ありのままに生きる」ことを推奨するものではありません。互いの違いを受け入れない社会の側にも「手直し」が必要だと訴えているのです。

ちなみにデイズニーによる『アナと雪の女王』の次の作品は『マレフィセント』でした。同作は、『眠れる森の美女』における悪役の魔女・マレフィセント側の視点から、物語を再

解釈した映画です。「魔女と社会とがどう共生するのか」という点で、『アナ雪』とも連続したテーマです。そこには、魔女という存在を、血も涙もない悪魔として描くのではなく、あくまで「排除されてきた悲しみを持つ者」として描き直すというコンセプトがあります。こうした作品群を見ると、ディズニーコード3・0の世界観は、さらに前へと進んでいくのだという意思表示が感じられるでしょう。

### なぜハンスはクリストフに「負ける」のか？

それにしても、最初に『アナ雪』を見た時に意外に感じたのは、王子・ハンスの豹ひょうへん変ぶりでした。彼が権力を狙っているという伏線があまり見られず、唐突に思えたのです。しかし、映画を繰り返し見ると、ハンスの行動にもその前兆を見い出せることが分かります。そして、クリストフがハンスよりもヒーローに似つかわしかったことの理由も。

ディズニーコードには、1・0から3・0に至るまで、変化を伴うものもあれば、共通のものもあります。そうした中でも、

・動物や異形の者に対して優しきは善

・勤労は善

といったルールは、デイズニーコード3・0になっても変わらないようです。

ヒーローであるクリストフは、映画冒頭のシーン、幼少の頃からトナカイのスヴェンと共に過ごし、一生懸命に働きます。一緒に暮らし、よだれまみれの人参にんじんをシェアして食べ、寝る時まで一緒。さらにクリストフは、トロールといった異形いぎような者たちとも仲が良い。

一方、馬に乗って登場するハンスは、この馬と意思疎通が上手くいつているようです。最初の登場シーンでは、馬によって海に落とされる失態を演じてしまいます。勤労度、博愛度でいえば、圧倒的にクリストフに軍配が上がります。

また、アナとハンスが一緒にハモリながら歌う「とびら開けて」(原題: Love Is an Open Door)でも、よくよく聞くと、アナの欲望にハンスが調子良く合わせているだけと取ることができません。ハンスのコーラスは、アナの歌声を追いかける形で重ねられます。決定的なのは、二番のかけあいでしょうか。日本語版では

ハンス 教えてよ

アナ え？

ハンス 何が好きか

アナ サンドイッチ！

ハンス 僕と同じじゃないか！

となっているシーン。これを見ると、息がぴったりのように見えるのですが、英語詞では

ハンス I mean it's crazy (おかしなよね)

アナ What? (なに?)

ハンス We finish each other's (僕らお互いにや…)

アナ Sandwiches! (サンドイッチねー)

ハンス That's what I was gonna say! (まさにそれを言いたかったんだ！)

となっていて、会話がすれ違っているのを、無理やりハンスが合わせている様子が分かります。初見であれば、単にアナが天然ボケのようにも見えますが、二度目からは、ハンスの意図があるのだとしか見えなくなります。こうしてデュエットを歌い終え、ハンスは突然、アナにプロポーズ。運命の2人に時間は関係ないのかもしれませんが、ハンスが功を焦っているようにも見えます。

ちなみに、デイズニーコードには、3・0に至るまで共通しているものとして

・「権力欲を肥大させる者は悪」

というものがあり、ハンスはそれに見事に当てはまってしまいました。ハンスは隣国の13番目の王子。上に何人もの兄がいて、王位継承権がほとんどない。生存戦略をかけた犯行であるとも言えますが、姉妹をその手で葬り去ろうとするなど、やっていることはかなりえげつないです。

## 「真実の愛」の重み

アナがエルサに最初に呼びかける歌、「雪だるまつくろう」（原題：Do You Wanna Build a Snowman?）からは、アナがエルサと共に遊び、共に生きてがっている気持ちが痛いほど伝わってきます。アナは、日本語版では

雪だるま作ろう

大きな雪だるま

雪だるま作ろう

自転車に乗ろう

と歌っていますが、英語詞では

雪だるまつくろなう?

Do you wanna build a snowman?

雪だるまじゃなくなっちゃったっていいんだけど……

It doesn't have to be a snowman……

雪だるまつくらなう？

Do you wanna build a snowman?

それとも広間で自転車を乗り回そうか？

Or ride our bikes around the halls

と歌っています。あまり変わらないようにも思えますが、英語版だと、アナがあの手この手でエルサを連れ出そうとしている様子がより強調されています。当然ながら、それは単にアナが退屈だからではなく、エルサのことを想うため。しかし、その願いはずっと叶いませんでした。

エルサは常に、「入れてはいけない、見せてはいけない」(Don't let them in, don't let them see)と  
言われ続けていました。そんなエルサに対して、両親が亡くなった後、アナは歌で次のよ  
うに呼びかけます。

お願いよ　そこにいるのはわかってる

Please, I know you're in there

みんな、あなたはどこに行ったのかとみんなが尋ねている

People are asking where you've been

「勇気を出して」と言わせるから

They say "have courage"

そう努力してらるわ

and I'm trying to

私はあなたのためについて頑張ってるのよ

I'm right out here for you

どこかへ中に入れて

just let me in

家族は私たちだけじゃないなら

We only have each other

あなたと私の2人だけ

It's just you and me

私たち、どうしたらいい？

What are we gonna do?

……雪だるまを作ろう

…: Do you wanna build a Snowman?

日本語版

ねえ、ドアを開けて心配してるの

会いたいわ そばにいれば 支え合える2人で

あたしたちだけで これから どうしていくの？

雪だるま作ろう

アナはこれまで「遊ぼう」と呼びかけてきたのですが、最後は「中に入れて」(let me in)と呼びかけています。外に出て来ると呼びかけるのではなく、歩み寄ろうとするアナの成長も感じられます。しかし、それでもエルサは親の言いつけ通り、部屋の中で一人、孤独と

悲しみを堪え忍んでいます。そうした孤独の時間の中、互いに何年も過ごしてきたのです。

そんな2人が、ようやく抱き合える瞬間がやってきました。エルサを守るために氷漬けになったアナ。アナを抱きしめ、涙を流すエルサ。するとアナにかかっていた魔法は解け、エルサも魔法のコントロールに自信を持つようになります。アナはエルサに「愛している」と伝える。オラフはそんな2人をみて、「真実の愛が凍った心を解かしたんだ！」(Arc of true love will thaw a frozen heart)と叫びます。

剣を弾き返されて倒れていたハンスが起き上がると、クリストフが彼を懲らしめようと身乗り出す。そんなクリストフを制止し、自らハンスに近づいたアナ。アナの姿を見て、「心が凍ったはずでは？」と驚くハンスに対し、「心が凍っているのはあなただけだ」(The only frozen heart around here is yours)と告げ、勢いのある右ストレートを顔面に食らわせます。それを見ていた人々は拍手喝采です。

そして時間が経ち、アナとクリストフもいい感じ。新しいソリにもクリストフは大喜び。オラフも夏を満喫しています。エルサも臣民のために能力を使い、臣民も王女を大歓迎。アナとエルサは、次のように語りあいます。

アナ 門が開いているのっついていいね (I like the open gates)

エルサ もう二度と閉めないから (We are never closing them again)

そして2人は手を取り合い、スケートを楽しみます。そんな2人を祝福するように、オーケストラでの「雪だるまつくろう」が鳴り響く。長い時間をかけて、ようやく2人は、一緒の時間を過ごすことができるようになったのです。もちろん、エルサのことを怪物扱いする者はこの場に一人もいません。凍った時間、冷たい心は、すでに愛によって解けているのですから。

ここまで、駆け足で『アナ雪』の構造を読み解いてきました。歌詞や構成を丁寧にみること、『アナ雪』が現代的な寛容さを目指して作られた作品であるというのがお分かりいただけたかと思います。

ただ、ディズニー映画はこれまでも、原作や過去作品の物語世界への応答、もしくは現実社会からの要請に応じて、物語の世界観やキャラクターの描き方などをアップグレードしてきました。突然『アナ雪』が登場したわけではなく、そこに至るまでの前史がありま

す。それは、プリンセスに現れる女性像のとらえ方だけではありません。魔女像や王子像をはじめ、様々な系譜の更新が『アナ雪』へとつながっていったのです。

映像作品を製作するということは、過去の作品群に対し、新しいクリエイターが挑戦するという運動でもあります。「かつて描かれたモチーフを、自分たちならこう描く」と現代の観客にアピールする。そのためには、過去の作品を知ったうえで、それを乗り越えて新しくアレンジを施す<sup>ほどこ</sup>必要があります。特にデイズニー作品は、トップクラスのクリエイターが関わりと同時に、絶対王者としてのヒットを求められ、過去作品と嫌でも比べられる。そうした環境下ですから、想像力が更新され続けるのも当然と言えば当然でしょう。

デイズニーが作品を通して、乗り越えていったものの系譜。それを、本書ではデイズニーコード1・0、2・0、3・0と区分けしました。おおまかな作品区分を確認します。

### 〈デイズニーコード1・0〉

『白雪姫』（1937年）、『シンデレラ』（1950年）、『眠れる森の美女』（1959年）のデイズニー第一次黄金期と言われている古典作品群に見られる法則。

## 〈ディズニーコード2・0〉

『リトル・マーメイド』（1989年）、『美女と野獣』（1991年）、『アラジン』（1992年）のディズニールネッサンスと呼ばれる第二次黄金期の作品群にみられる法則。

## 〈暗黒期とライバルの成功〉

なお90年代後半よりディズニーは試行錯誤の時期が続き、ディズニーコード2・0をいつまでも更新できない暗黒期が続くこととなります。一方で、ディズニーが配給しているピクサー・アニメーション・スタジオの作品などが、ディズニーコード2・0を乗り越える作品群を作り出していきます。

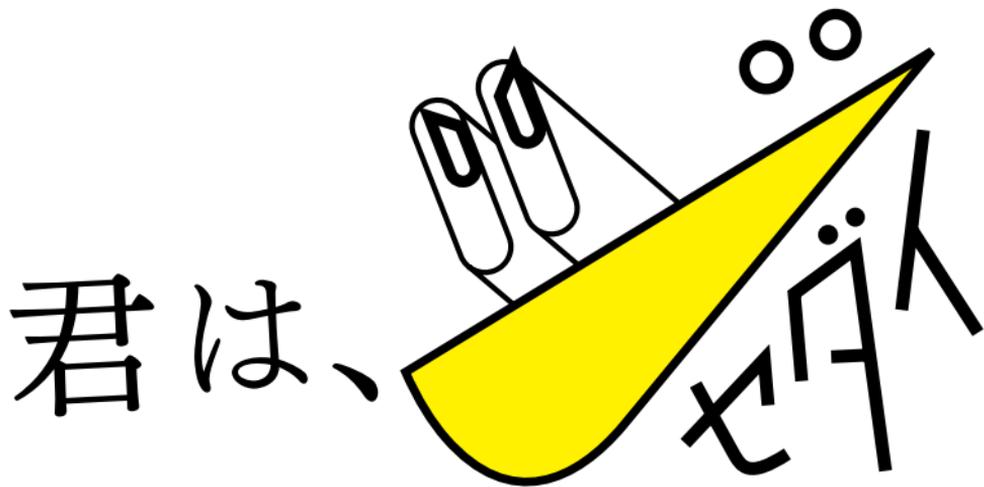
## 〈ディズニーコード3・0〉

『アナ雪』に見られる最新の法則です。00年代後半から10年代前半には、『魔法にかかられて』（2007年）、『メリダとおそろしの森』（2012年）など、『アナ雪』の前にもディズニーコード3・0の萌芽とも言える作品群が作られてきました。『アナ雪』以後の作品『マレフィセント』（2014年）にも、これからの時代の表現を模索した痕跡が見えます。

これが、ディズニーコードを巡るおおまかな流れです。ディズニーコードの移り変わりは、映画を観る側の欲望と時代の変化の表れともとらえることもできるでしょう。

これまで見てきたように『アナ雪』は、ディズニー映画でありながら、ディズニーヒロイン史に自己言及したような作品でもあります。ただし、こうした自己言及性もまた、『アナ雪』が初めてではありません。実は、古典的なディズニーヒロインたちの時代から、常に「新しいヒロイン像」の模索と自己言及が行われてきたとさえ言えます。ディズニーの新陳代謝の運動、その今のところの集大成が、『アナ雪』だというわけです。

次章からは、時計の針を巻き戻し、ディズニーコード1・0の世界へと足を踏み入れていきたいと思います。その歴史を振り返り、再び『アナ雪』の話に戻った時、今とはまた異なる解釈を見つけられるようになっていくはずです。



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

**メインコンテンツ  
イベント**

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

**ニッポンのスタートアップ**

3年後に再会することを約束して行う、未来アポ付きスタートアップインタビュー！

**ジセダイジェネレーションズU-25**

彼らはどうやって「闘う相手」を見つけたのか。各界の超新星に、その軌跡と未来を聴く。

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

**行動せよ!!!**